

上野の杜の 波瀾万丈

第六回 プリングスハイムの 時代

ヨーロッパの歌劇場で舞台監督まで務めた人物が、昭和初めの東京音楽学校に着任した。マラーやストラヴィンスキーなど当時の現代曲を次々に取り上げた、忘れえぬユダヤ系音楽家。

橋本久美子



ドイツより招聘された大物

昭和六（一九三一）年九月十一日、夏休み明けの始業式。奏楽堂の壇上に新任の外国人の姿があった。ベルリンからシベリア大陸を横断し、船に乗り継ぎ約二週間かけて着京したクラウス・プリングスハイム（一八八三年七月二十四日ミュンヘン郊外―一九七二年十二月七日東京）である。彼を支える乗杉嘉壽校長は欧米視察のため不在。高野辰之校長代理による紹介が同窓会誌『同声会報』に載っている。「氏はミュンヘン市に生まれウインでマラーに就き、後ブラーグブレーム等々の劇場の歌劇作者、舞台監督や顧問に歴任し、一九一八年マツクス・ラインハルトに招聘せられたといふ立派な履歴をもつて居られる方で、斯くの如き世界一流に属する先生を迎へて吾々は歓喜に堪へぬ」拍手に迎えられた四十八歳は、歴代お雇い外国人教師のなかでも、歌劇場音楽監督と指揮者歴二十年以上、新聞四紙の批評を担当する大物であった。ユダヤ系の名門プリングスハイム家は祖父ルドルフが一代で富を築き、数学者で美術蒐集家の父アルフレートは息子とヴァーグナーをピアノ連弾で楽しみ、ナチスに接収されるまでミュンヘンに美術館のような豪邸を構えていた。

プリングスハイムがなぜ招聘に応じたのか。彼を追って昭和八年来日した長男ハンス・エーリクが昭和五十九年に本学百年史編集委員会に語ったところでは、父は東京音楽学校のシャルルス・ラウトルツプから後任に誘われそのままにしていたが、ベルリン市立劇場

総監督就任を逃し、急遽、決意した。市議会で選出される市立劇場総監督に、与党・社会民主党機関紙の音楽批評家クラウスが推薦されることは確実と見られていた。ところが一九三二年五月の選挙直前、議長宅に夜遅くかけた電話を取り次いで貰えなかった彼は、持ち前の癪癪を爆発させ、電話口の女性を罵倒した。翌日、すっかり機嫌を直して議長に「お宅の女中はひどい」と言うのと、「それは私の妻だ」。クラウスは少年時代から相手が上級生でも議論し喧嘩し、翌日はニコニコ話しかける人気者だったが、今回は彼の流儀が通用しなかった。次男クラウス・フリーベルトは著書『クラウス・プリングスハイム二世回想録』で、父に東京行き白羽の矢が立ったのは、酷評家としてドイツ中から反感を買っていたからだという。ともあれ電話事件の三か月後、彼は上野に向かった。

賛否両論の斬新なプログラム

東京音楽学校は創立から四十四年目。昭和七（一九三二）年初の作曲専攻生が入学、初の外国人男性声楽教師を増員、昭和八年上野児童音楽学園も開園、また昭和十一年には邦楽科設置という乗杉校長時代である。プリングスハイムは着任早々、音楽学校と海軍軍楽隊を併せた八十名ほどのオーケストラと、全校生徒二百三十八名の合唱練習を開始した。十二月五日の日比谷公会堂での初演奏はバッハ、ベートーヴェン、ブラームスにヴァーグナーの《トリスタン前奏曲》で概ね好評。練習は週十時間、定期演奏会は年四回と倍増。昭和十二年七月の「告別演奏会」まで、演奏会は四十

回に及んだ。日本初演はマラーの交響曲五曲を含む三十二曲、乗杉校長と音楽学校に献呈した自作《管絃楽協奏曲》は世界初演である。ヴァイルの学校オペラ《ヤーザーガー》は世界初演から二年目に日本初演され、ヴァーグナーの演奏会形式《ローエングリン》の部分日本初演はレコード十時盤四枚に吹き込まれた。マラーやストラヴィンスキーなど近現代曲が急増して演奏会も一新。「油のりすぎ」の異名をとった校長も、外国人教師は週十八時間以内という契約が破られ「熱心の余り十数時間も余分に御奉公」、「指導振りは熱誠そのもの」で「五時間位ブツ通し」の練習に圧倒された（『音楽評論』昭和十二年）。『文部省関係往復文書類』によれば昭和十二年四月現在の担当時間数は、管絃楽、合唱、唱歌、作曲合わせて二十二時間。ほかの外国人教師より四〜六時間も多い。

欧州楽壇と肩を並べるプログラムには、賛否両論、むしろ酷評が相次いだ。ではプリングスハイムは孤軍奮闘、音楽学校に失望しなかったのだろうか。意外にも、彼は東京音楽学校の演奏や生徒たちについて悲観的な言葉を発していない。それどころか東京音楽学校の明日を、バイロイト祝祭管絃楽団、あるいはベルリン・ジングアカデミーと見定め、しかも生徒たちの能力と努力をもつてすれば実現可能と考えた。また音楽学校は古典派で良いというのは「錯誤と無理解の連鎖」と反論。強硬で高踏的な姿勢は批評家を敵に回したが、彼は何より生徒との日々在夢中であった。合唱の時間に生徒の名前をおかしな発音で呼んだときに沸き起こった「嬉しさうな、実に心からの高笑ひ」で、

「生徒達との仕事が私にとつて非常に軽快な、愉快な、楽しいものに成った」「最初の日から音楽学校を我家の様に感じた事は、私自身にとつて何よりの驚愕であつた」(学友会『音楽』第十六号、第十八号)。

教子^{のほり}は金子登、山田和男、藤山一郎、柴田陸^{りつし}、長門美保、安部幸明、平井康三郎、高田三郎、長谷川良夫等、指揮、音楽、作曲の各分野にわたる。ピアノ専攻だった山田は、著書『二音百態』でマーラーに「ふるえがくるほどに感銘を受け」「音楽の醍醐味に開眼した」と記し、金子は聞き取り調査に答えて「拍と拍の間の間隔」を教わったと語る。彼の特訓を受けた児童学園も原語の合唱で出演。手厳しい批評家も子供たちには温かかった。太田黒元雄は昭和十年二月のマーラー《第三交響曲》について「子供の合唱がいちばんうまかつた」(『東京日日新聞』)、諸井三郎は同年十月のリスト《ダンテ交響曲》〈煉獄篇〉に出演した児童

童合唱を「天国の救ひ」(『東京朝日新聞』)と評した。近現代曲を広めた功績

契約は二年ごとに更新されたが、昭和十二(一九三七)年七月三十一日の満期には更新されなかった。ナチスのユダヤ人政策に疎い日本国内は突然の出来事と驚いた。しかし、昭和九年十月「シユトラウス生誕七十年祝賀日独音楽交換放送」において、シユトラウス作曲《十六声部無伴奏混声合唱》(日本初演)が、「二分の一ユダヤ人」であるプリングスハイム指揮によって、同盟国官立学校の奏楽堂から対独放送されたことは、ナチスにとつてもはや看過しがたい事件であつた。彼に対するドイツ政府からの圧力を示す資料は学内で確認されていないが、ナチス公認のヘルムート・フェルマーが、後任としてドイツ宣伝省に提出した履歴書は一九三七年二月十四日付。最後に「Heil Hitler!」



【写真2】
昭和8(1933)年3月卒業式
前列左より鴻澤又彦配属将校、3人おいてH.ヴェーバー・ヘニヒ(音楽)、H.ヴェルクマイスター(チェロ)、R.ボラック(ヴァイオリン)、L.シロタ(ピアノ)、K.プリングスハイム、乗杉校長、M.トル(音楽)、高野辰之(国語)



【写真1】
クラウス・プリングスハイム
(1883年7月24日～1972年12月7日)
1931年9月8日～1937年7月31日在職



【写真3】
昭和10(1935)年2月16日 第74回定期演奏会 日比谷公会堂
マーラー《第三交響曲》。アルト独唱：平原壽恵子、児童合唱：上野児童音楽学園児童、女声合唱：東京音楽学校生徒、管絃楽：東京音楽学校管絃楽部。管打楽器44名中32名とコントラバス5名中4名が海軍軍楽隊関係者



【写真4】
鎌倉霊園にあるプリングスハイムの墓(平成20年6月撮影)

とある。終戦の翌年の昭和二十一年八月に『東京新聞』に掲載されたプリングスハイムの話では、十二年にドイツ宣伝省から辞職強要の通達二度あったという。奏楽堂で十三年にヒトラーユーゲント歓迎演奏会が行われたが、その後も音楽学校はユダヤ系の「外国人講師」を採用した。十三年三月にはレオニード・クロイツァー(十九年三月)、十四年六月には「四分の一ユダヤ人の可能性と思想問題」を理由とする外務省からの圧力を退け、音楽学校就職を切望するマンフレッド・グルリットを指揮ではなく作曲とピアノと合奏の担当で(十八年三月)。

さて、プリングスハイムは昭和十二年秋タイに渡るが、ドイツを脱出した次男を迎えるため十四年五月再来日し、東京で終戦。二十一年秋次男と渡米。二十六年武蔵野音楽大学教授となり、三十四年勲四等瑞宝章。四十七年十二月七日、東京で八十九年の生涯を終えた。音楽学部定期演奏会は彼の弟子たちの指揮で再開した。昭和三十二年十二月は山田和男がプーランクの《二台のピアノと管弦楽のための協奏曲》とフォーレの《レクイエム》、三十五年六月金子登がシユトラウスの《ティル・オイレンシュペーゲルの愉快ないたずら》、同年十一月も金子がマーラーの《交響曲第二番》「復活」をプリングスハイムの六年間がなければ、本学で近現代曲が親しまれるにはさらに年月を要したであろう。

(はしもと・くみこ／音楽学部講師)

次号予告

「中国人留学生の一斉帰国」昭和十二年頃
明治三十年代末より美校は中国、台湾、朝鮮半島から多くの留学生を受け入れ、日本人と一緒に教育し、留学生たちの多くは帰国後母国の美術の指導者となり、また、ほかの分野でも活躍した。現在、中国や台湾で尊敬を集めている李叔同をはじめ、著名な人が多い。
しかし、昭和十二年の日中戦争勃発を機に、中国人留学生の一斉帰国と美校を中心とする日中美術交流運動の途絶という事態を招き、その後長年にわたって疎遠な状態が続くなか、両国とも上記交流の歴史を忘れてしまった。戦前の交流運動を振り返り、今後の交流を考える上での一助としたい。